大日經の梵文斷編について

松　長　有　慶

I

大日經のサンスクリット原典は，いまだ發見されていない。一方，日本の眞言密教において，大日經とつねに對置される金剛頂經（攝眞實經，Tattva-saṃgraha）のサンスクリット本はすでに發見された。それも完本が二と斷片が二とである。[1] しかし大日經のサンスクリット原典は，現在のところその存在の有無さえ判明していない。

わが國における大日經の研究は，主として漢譯を中心として行われてきた。それにチベット譯が參加したのは最近のことである。だがわが國において，大日經のサンスクリット本を求めようとする努力が拂われなかつたわけではない。すでに二百年もまえ，慈雲は大日經の一部を，その漢譯にもとづいてサンスクリット語に還元しようと試みた。[2] また最近では大日經に說かれている眞言の一部が，漢音譯もしくはチベット音譯を基準として，サンスクリット語に還元されている。[3]

大日經のサンスクリット寫本の發見せられる可能性もほとんど期待しえない現在，大日經に關するサンスクリット本としては，ややもすれば還梵されたもののみに，一般の關心が向けられがちである。しかしわれわれは，現在のところ大日

（1） Tattva-saṃgraha の完本の一つは G. Tucci 教授發見のものであり，その一部分は校訂出版されている。（G. Tucci: Indo Tibetica I, pp. 135-140）他の一本は Snellgrove 博士の所持する寫本である。これらサンスクリット本に基く研究はわが國でも二三發表されている。斷片としては，荻原雲來博士が報告したもの（文集 pp. 747-753）と Cambridge MSS 中の斷片（Add. 1653）がある。後者の斷片は Bendall の Cambridge MSS Catalogue 中にその名がみえ，筆者はその寫眞版を入手し目下解讀中である。

（2） 慈雲尊者全集第 9 卷下 pp.378-381.

（3） 足利惇氏教授の大日經の梵語還元について，山口博士還曆記念論文集　昭和 30, pp. 106-121（尾）；清田寂雲氏の大日經眞言の原文について，印佛研 8～1, 昭 35, pp. 267-279 など。

經の完本を望みえないとしても，その一部分のサンスクリット文を參照することは可能である。それには，サンスクリット原典の現存する他の經典，論書，注釋書のなかに，大日經からの引用文を探し出してゆくという操作を必要とする。現在までに，大日經の若干の部分と同一內容をもつサンスクリット文の斷編がいくつか發見されている。さらに筆者が研究している密敎關係の文獻の中にも，大日經からの引用個所が二三存在していることが判明した。

そこで，これを機會に，現在までに大日經から引用されたことがすでにあきらかな個所に，さらに新たに發見されたものを加えて，そのサンスクリット引用文全體を，大日經の內容順に整理してみようと思う。しかし，それらの引用サンスクリット文を，現存の大日經の漢譯あるいはチベット譯と對照した場合，かならずしも三本が一致するとはかぎらない。この意味において，引用されている大日經の斷篇が，かならずしも本來の大日經のサンスクリット本と同一のものであつたかどうかをにわかに斷定することはできない。

II

大日經の中心思想は，住心品第一に說かれる三句にあるといわれる。三句とは菩提心を因とし，大悲を根とし，方便を究竟とす，の三である。さいわいなことに，大日經の中心思想ともみなされるこの三句が，カマラシーラ（Kamalaśīla, 蓮華戒）のバーヴァナークラマ（Bhāvanā-krama）の初篇に引用されている。そしてこのバーヴァナークラマの初篇のサンスクリット原典が近ごろ出版されたために，われわれは三句のサンスクリット文を容易に參照しうる便を得た。すなわち

tad etat sarvajñānaṃ karuṇāmūlaṃ bodhicittahetukam upāyaparyavasānam iti /[4]

がそれである。このサンスクリット文を，大日經の漢譯[5]，チベット譯[6]と對比した場合，大悲—根，菩提心—因の兩句の順序が逆になつている。バーヴァナークラマの初篇の漢譯に相當する施護譯の廣釋菩提心論もまた，サンスクリット文と同樣である[7]。この相違は大日經の三句における菩提心空の重視の立場から，バーヴァナークラマの大悲中心の立場への思想的な展開を示している。このことは，バ

（4）G. Tucci: Minor Buddhist Texts, part II, p. 196.
（5）大正藏 vol. 18, p. 1 c.
（6）服部融泰校合：藏文大日經 p. 9.
（7）大正藏 vol. 32, p. 565 b.

ーヴァナークラマ冒頭の主題の敍述[8]，さらにはバーヴァナークラマとその構造に類似性をもつ不空の菩提心論に說かれている[9]行願（大悲），勝義（空），三摩地の修習次第の配列によつても明瞭である[10]。したがつて，大日經の原本は，その漢譯，チベット譯と同樣に，菩提心—因，大悲—根，方便—究竟の順序であつたと推定しうるであろう。住心品では，この三句のほかにサンスクリット文は發見されていない。

III

具緣品第二に說かれる14偈半のサンスクリット文の偈頌が，ジャワで發見されたサンヒヤンカマハーヤーニカン（Sang hyang Kamahāyānikan）の序文のなかに存在することが明らかにされている。全部で42偈のサンスクリット文からなるこの序文は，1913年スパイヤー（J. S. Speyer）によつて，原文に校訂および飜譯を付して發表された[11]。この序文の42偈のうち，14偈半が大日經の具緣品の一部に相當することを發見したのは荻原雲來博士である。博士はこの14偈半に相當漢譯を配するとともに，42偈全體の和譯と，さらに若干の本文校訂をおこなつた[12]。

この序文には俗語が多く，古典サンスクリットによつて說明しえない點がすくなくない。これはジャワで發見された寫本であるために，ジャワの俗語が混入したものか，大日經自體の俗語的な表現によるものか，いずれとも斷定しえない。しかし，大日經の他の引用サンスクリット文が，この書物ほどひどい俗語をもつていないところから，地域的，時代的な改變が加えられたものとも考えられる。

この序文のサンスクリットの校訂には，スパイヤー，荻原兩氏とも苦心しておられる。しかし，この原文にさらに大日經のチベット譯を參照することによつて，兩氏の疑問とした個所，および誤解している個所など二三發見することができた。それゆえ，つぎにスパイヤー出版のサンスクリット文を再び揭げ，スパイヤー，

---

(8) G. Tucci: loc. cit. p. 229. ここには「一切智をすみやかに得んと欲する者は，要するに大悲と菩提心と行と，この三句に專心すべきである」とその基本的な立場がまず表明されている。

(9) 大正藏 vol. 32, pp. 572 c–573 c.

(10) くわしい說明は，松長：タントラ佛敎の倫理觀，日本佛敎學會年報 vol. 27, pp. 180–187 參照。

(11) J. S. Speyer: ZDMG 67–2, 1913, s. 347–362, Ein altjavanischer mahāyānistischer Katechismus Sang hyang Kamahāyānikan.

(12) 爪哇に於いて發見せられたる密敎要文，密敎 5〜2, 大正 2, 文集 pp. 737–746.

荻原兩氏の校訂に基づきつつ，大日經のチベット譯および漢譯を參照して，その相違點を注記してみよう。

1 ehi[13] vatsa mahāyānaṃ mantravāryanayaṃ[14] vidhim /
deśayiṣyāmi te samyak bhājanas tvaṃ mahānaye /

2 atītā ye hi sambuddhāḥ tathā caivāpy anāgatāḥ /
pratyutpannāś ca ye nāthāḥ tiṣṭhanti ca jagaddhitāḥ /

3 taiś ca sarvair imaṃ vajraṃ[15] jñātvā mantravidhiṃ param /
prāptā sarvajñatā vīraiḥ[16] bodhimūle hy alakṣaṇa /

4 mantraprayogam atulaṃ yena bhagnaṃ mahābalam /
mārasainyaṃ mahāghoraṃ śākyasiṃhena tāyinā /

5 tasmān matim imāṃ varya[17] kuru sarvajñatāptaye[18] /

6 eṣa mārgavaraḥ śrīmān mahāyānamahodayaḥ /
yena yūyaṃ gamiṣyanto bhaviṣyatha tathāgatāḥ /

7 svayambhuvo mahābhāgāḥ[19] sarvalokasya yetiyāḥ[20] /
astināstivyatikrāntam ākāśam iva nirmalam /

8 gambhīraṃ sarvatarkebhir[21] apy[22] atarkyam anāvilam /
sarvaprapañcarahitaṃ prapañcebhiḥ prapañcitam /

---

(13) tib., 服部本 p. 45；漢，大正藏 vol. 18, p. 4.

(14) Kats, mantracārya°; Speyer, mantracaryā° or mantrācāryā°; tib. mantracaryā'° gsaṅ sṅags spyod. 第21偈には mantrācāryanayaṃ がある。

(15) tib., bzaṅ, 漢，妙法，bhadraṃ？荻原博士は漢の「法」をとりこれを dharma とみるが，むしろ漢の「妙」をとり tib. のごとく bhadraṃ とすべきか。

(16) Spy., alakṣaṇā とすべきかという。

(17) Kats は vārttāṃ と訂正するが tib., bu yis よりみて訂正しない方がよい。

(18) 第5偈の後半偈以下は大日經の漢 tib. 兩譯と合致しない。

(19) 漢，龍 °nāgāḥ, 荻原博士はこの方がもとで bhāgāḥ は寫誤とみる。tib. はやはり bhāgāḥ, skal pa chen po.

(20) Kats, yajñiyāḥ; Spy., ye priyāḥ, 荻原博士は漢の「塔」によりcetiyāḥ（正しくは caityāḥ であるが頌法にそむくゆえ，俗語形をとる）とみる。tib. の mkhyen po より skt. にかえすと jñāninaḥ となるか？

(21) 荻原，漢の「諸法」により sarvadharmebhir と訂正。ただし tib. の rtog ge thams cad は原文と一致するゆえ，tib. に從えば訂正の要はない。

(22) 荻原，漢の「難了無合藏」により apratarkyam anālayam と訂正。これは tib., rab tu mi rtogs gnas med pa とも一致する。

(23) 荻原，漢の「作業妙無比」により sarvakriyābhir atulaṃ と訂正するも疑問あり。tib., las daṅ bya ba la sogs bral は skt. とも一致する。

9 (23)karmakriyāvirahitaṃ (24)satyadvayam anāśrayam /
idaṃ yānavaraṃ śreṣṭhaṃ labhiṣyatha naye sthitāḥ /
16 (25)ajñānapaṭalaṃ vatsa (26)punitaṃ jinanes tava /
(27)śalākair vaidyarājendraiḥ yathālokasya taimiram /
17 pratibimbasamā dharmā acchāḥ śuddhā anāvilāḥ /
(28)agrāhyā abhilāpyāś ca hetukarmasamudbhavāḥ /
18 evaṃ jñātvā imān dharmān nissvabhāvān anāvilān /
kuru satvārtham atulaṃ jāto 'sy urasi tāyinām /
20 adyaprabhṛti lokasya cakraṃ vartaya tāyinām /
(29)sarvatra pūrya vimalaṃ dharmaśaṅkham anuttaram /
21 na te 'tra vimatiḥ kāryā nirviśaṅkena cetasā /
prakāśaya (30)mahātulaṃ (31)mantrācāryanayaṃ param /
22 evaṃ kṛtajño buddhānām upakārīti (32)gīyate /
te ca vajradharāḥ sarve rakṣanti tava sarvaśaḥ /

IV

インドの後期密教の聖典のなかで，最も重要視されるものの一つに，祕密集會（Guhyasamāja）タントラがある。この祕密集會タントラに對する注釋書は，數多くチベット大藏經のなかに收められている。しかしそのうちで，サンスクリット寫本が現存するのは，灯作明（Pradīpodyotana）だけである。この注釋書はサンスクリット寫本およびチベット譯（東北 No. 1785）ともに，その作者をチャンドラキールティ（Candrakīrti）と傳えているが，その製作年代は，9世紀から10世紀にかけてであると思われる。この寫本のなかに，ビルシャナ現等覺（行）タ

(24) 荻原，satyadvayasamāśrayam と訂正するが，漢の「常依於二諦」に依るならば nityam dvayasatyāśrayam とすべきである。tib. は bden pa gñis la gnas pa yis で āśraya に對する否定辭なし。
(25) tib., p. 107, 漢 p. 12 a, tib. この半偈一致せず。
(26) Spy., apanītaṃ jinais と訂正。漢とも一致す。
(27) tib., purāṇair, snon gyi, 漢＝skt.
(28) Spy., agrāhyānabhilāpyāśca と訂正。これは漢の「離言說」，tib. の brjod du med とも合致する。
(29) 荻原，apūrayan samantād vai dharma°, と訂正。tib. vimalaṃ 缺。
(30) 荻原，漢の「開示於世間」によつて loke 'smin と訂正。これは tib. とも合致す。
(31) tib., mantracaryā°, gsaṅ sṅags tpyad paḥi
(32) 荻原 gīyase

ントラ (Vairocanābhisambodhi (caryā) tantra)，すなわち大日經よりと出所の明記された引用文が三ケ所にわたつてみいだされる。

そのうちの一ケ所は，大日經の受方便學處品第十八の一節である。これを現存の大日經の漢譯，チベット譯と對比すると，サンスクリット文の引用が，一節の全文ではなく，拔萃であることがわかる。すなわち，

(33) iha bodhisattvaḥ sarveṇa (34) sarvam adattādānāt prativirato bhavati /
anyatra matsariṇa iti /

がそれである。これは受方便學處品中の菩薩の十戒を說くその第二戒に相當する文の一節を取捨したものと思われる。

引用三ケ所のうち，殘りの二ケ所は說本尊三昧品からのものである。その最初は，

devatārūpam api guhyakādhipate dvividhaṃ pariśuddham aśuddhaṃ ceti / tatra pariśuddham adhigatarūpaṃ sarvanimittāpagataṃ / apariśuddhaṃ nimittaṃ rūpa〔ṃ〕varṇasaṁsthānañ ca/tatra dvividhena devatārūpeṇa dvividhakāryaniṣpattir bhavati/ sanimittena (35) sanimittāsidhir upajāyate / animittenānimittāsiddhir /
iṣṭā jinavaraiḥ (36) 〔siddhiṃ sanimitte sanimittam /〕
animitte sthitvā vai (37) sanimittaṃr pasādayate /
tasmāt sarvaprakāreṇa nirnimittam nisevyata iti /

である。ここに引用されている部分は，大日經においても，漢譯とチベット譯の理解がまつたく逆で，問題視されている個所である。すなわち，本尊の身に有相と無相の二種がある。有相の本尊の身を觀想することによつて，有相の悉地を得，無相の本尊の身を觀想することによつて，無相の悉地を得る。以上の赴旨を長行でまず述べ，再び偈頌をもつて反復する。そして，ゆえにあらゆる場合に無相に住すべし，というのが漢譯の取意である。これに反し，チベット譯では，有相により有相の悉地を，無相により有相の悉地をも得る。ゆえにつねに無相に住すべし，と理解されている。無相の本尊の身の觀想によつて，得るのは漢譯では無相

(33) Pradīpodyotana skt. ms. fol. 58 b^{6}, tib. 64 b^{7}。大日經漢, p. 39 b, tib., loc. cit. pp. 363–364。

(34) 大日經，漢には sarveṇa 缺，tib. には sarveṇa sarvaṃ 缺。

(35) この場合, skt. は漢と同じ，tib. は animittena sanimittā°, mtshan ma med pas mtshan ma daṅ　bcas paḥi dnos grub par ḥgyur ro /

(36) skt. 缺，tib., dṅos grub rgyal ba dam pa bśed により補う。

(37) この場合 skt. は tib. と同じ。漢 animittaṃ 無相悉地。

の悉地であり，チベット譯では有相の悉地である。善無畏，一行による漢譯系大日經疏においても[38]，ブッダグヒヤ(Buddhaguhya)系のチベット譯の大日經廣釋においても[39]，この相反する理解はかわりがない。この點，灯作明に引用されている大日經は，サンスクリット寫本およびチベット譯ともに混亂している。すなわち，長行の部分では，無相—無相と漢譯系と同趣旨を說きながら，偈頌においては，無相—有相のチベット譯系の說を採用している。このように同一のテキストの前後において，矛盾をそのまま承認していることは，兩系統の解釋が，混亂して後世まで行われていた證據であるとも考えられる。

灯作明では，他の個所において，說本尊三昧品の前述の文と同趣旨の一節を引用している。すなわち，

[40]naiva nimittasamādhisthitasya nirnimittaṃ phalaṃ /

がそれである。しかしおそらくこれは大日經そのままの引用ではないであろう。現存の漢譯，チベット譯に同文のものを見出しえない。むしろ前述のサンスクリット文の現存する個所の要約とみなされる。

V

大日經第七卷の增益守護淸淨行品には，九方便と，それぞれの眞言が說かれている。そのうち，第五番目に記されている發菩提心方便の眞言には，增加の句といわれるものが加えられている。この增加の句は，大日經の住心品のなかの心の考察の個所に，その萠芽が認められ，のちに密敎における菩提心理解の一基準と認められるほど重要視されるにいたつた。

この增加の句は漢譯では意譯されているが，チベット譯は音譯のままで，すでにそのサンスクリット形は知られていた。しかしこの部分は，すでにサンスクリット文の出版されている祕密集會タントラの第二章である菩提心分において，同文でみいだされる。それはつぎの通りである。

[41]sarvabhāvavigataṃ skandhadhātvāyatanagrāhyagrāhakavarjitaṃ dharmanairātmyasamatayā svacittamādyanutpannaṃ śūnyatābhāvam /

同じく大日經第七卷の供養儀式品第三に執金剛阿利沙偈が說かれている。これ

(38) 大正藏 vol. 39, p. 783 c.

(39) 東北 No. 2663, fol. 29 b.

(40) Pradīpodyotana. skt. ms. fol 42 a^5, tib. 46 a^5, 大日經，服部本 p. 201.

(41) skt. G. O. S. vol. LIII, p. 12, tib. 東北 No. 442, fol. 94 b, 漢 loc. cit., p. 46 b.

は10偈ばかりよりなる小さな讃頌であるが，このサンスクリット文が，サーダナマーラー（Sādhanamālā）中の三三摩耶王儀軌（Trisamayarājākalpa）に存在することがあきらかにされている。[42]

サンスクリット出版本あるいは寫本のなかで，大日經から引用したことがあきらかな個所は，現在のところ以上の通りである。密教系の聖典，儀軌，成就法，注釋書などのサンスクリット寫本は，世界各地に多數保存されている。その中から，大日經のサンスクリット原本が發見される日がいつかおとずれないとはかぎらない。しかしその可能性はきわめて少ない。大日經は，シナ・日本とは異なり，インド・チベットでは，後世それほど重要視されなかつたことも，現在それらの地に大日經のサンスクリット原典を探しえない一因とも考えられる。この點，眞言密教で大日經とつねに對置される攝眞實經の系統が，インドにおいて12世紀末まで，はなばなしい展開をみせたこととときわめて對照的である。金剛界系のマンダラが，9世紀以後にもたえず展開をつづけ，數多くの樣式をもつたマンダラがつぎつぎに製作されたに比して，大日經にもとづく大悲胎藏生マンダラの展開がまつたくみられないことも，後期密教における大日經の歷史的な地位の低さを物語つている。このような理由から，大日經のサンスクリット原典の發見を期待しえない現在，サンスクリットによる大日經からの引用文は，大日經研究のための貴重な資料といわねばならない。いまだ研究されていない密教關係のサンスクリット文獻は多い。したがつて，大日經の原典の發見はそれほど期待しえないとしても，今後，他の密教關係の資料を調査することによつて，大日經からの引用サンスクリット文を發見しうる機會があらわれないとはかぎらない。その場合，たえず整理を續けることによつて，大日經という日本密教ではきわめて重視される經典の原本の一隅が，次第にあきらかにされ，その原典研究のために，貴重な資料を提供することとなるであろう。

---

(42)　酒井紫朗教授：執金剛阿利沙偈に就いて，密教研究 68, 昭 14, pp. 107–119. 參照。Sādhanamālā, G. O. S. No.xxvi pp. 15–16. このサンスクリット文もここに掲げるべきであるが，上記の論文にその全文が引用されているためと，本論に與えられた紙數がつきたため，ここには省略する。